

宮城県文化財調査報告書第208集

東山官衙遺跡周辺地区 ほか

平成18年3月

宮城県教育委員会

序 文

新たな世紀を迎えるにあたり、豊かさを重視することが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模な場整備などの各種開発事業も年を追うごとに増加しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきています。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、開発関係機関などと十分な協議・調整を重ねたうえで調査することとなったもののうち、平成17年度に当教育委員会が国庫補助金を得て、学術的に重要な遺跡について行った発掘調査成果と、開発工事に先立って事前調査及び確認調査を実施した遺跡の成果を収録したものです。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成18年3月

宮城県教育委員会

教育長 白 石 晃

目 次

平成17年度発掘調査の概要

東山官衙遺跡周辺地区	1
浦宿B遺跡	47
青島貝塚	85
大橋貝塚	89
小森遺跡	95
西館館跡	99

例 言

1. 本書は、宮城県が平成17年度の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当した公共事業等に係わる発掘調査報告書である。
2. 各遺跡の発掘調査から調査報告書に至る一連の作業は、遺跡の重要性から保存を前提として遺跡の性格や構成を把握することを目的として文化財保護課が行ったほか、調査原因となった開発行為に関わる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
3. 各遺跡の保存協議や発掘調査に当たっては、開発関係部局や地元教育委員会から多大な協力をいただいた。
4. 本書に使用した各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図を複製して使用した。
5. 各遺跡の測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
6. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。
SI：豎穴住居跡 SF：土塁跡 SD：堀跡・溝跡 SK：土壤 SX：積土、その他
7. 土色の記述にあたっては、「新版 標準土色帖 1994年版」（小山・竹原 1994）を用いている。
8. 東山官衙遺跡周辺地区的報告で使用した図版1-1の空中写真は、「国土画像情報（昭和50年撮影カラー空中写真：CTO-75-27-C8a-10）国土交通省」を一部加工して転載、また、図版1-2は宮城県多賀城跡調査研究所が平成4年に撮影した空中写真を借用して使用したものである。
9. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て下記のものが執筆・編集した。

平成17年度発掘調査の概要 佐藤 則之 青島貝塚 村上 裕次
東山官衙遺跡周辺地区 佐久間光平 大橋貝塚 鈴木 朋子（亘理町教育委員会）
浦宿B遺跡 菊地 逸夫 小森遺跡 佐藤 憲幸
村上 裕次 西館館跡 須田 良平

10. 本遺跡の調査成果については、現地説明会や宮城県遺跡調査成果発表会などでその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。
11. 発掘調査の記録や出土遺物は、大橋貝塚（亘理町教育委員会）を除き、宮城県教育委員会が保管している。

平成17年度発掘調査の概要

平成17年度の埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金（総事業費5,238千円、補助率1/2）による調査は、加美町東山官衙遺跡周辺地区と松島町小森遺跡、同雄島遺跡について実施した。以下にはそれぞれの調査の概要を記す。なお、雄島遺跡については、調査期日の関係から、来年度に報告する予定である。

東山官衙遺跡は、古代賀美郡の中心的な遺跡として、国指定史跡となっている遺跡である。また、西・南側に隣接する壇の越遺跡には、東西・南北道路による約1町を単位とした方格地割が存在し、段丘の縁には築地塀と大溝が構築されていることが、加美町教育委員会が主体となって実施してきた調査によって明らかになっている。

ところで、東山官衙遺跡の北・東側の丘陵上には、大規模な土壙状の高まりや堀状のくぼみが残っていることが指摘されており、昨年度に周辺の踏査を実施したところ、各地で高まりやくぼみが平行して残っていることが確認できた。そこで、今年度は、これらの性格や時期・構造などを明らかにするために、3地点で発掘調査を実施した。その結果、高まりやくぼみは土壙と大溝であり、大溝の堆積土中に灰白色火山灰があることや出土遺物から、10世紀前葉以前の古代のものであることが明らかになった。また、これらは東山官衙遺跡を囲むように配置されており、東山官衙遺跡のさらに外側にある外郭施設である可能性が考えられた。

なお、東山官衙遺跡の南東約5kmにある城生柵跡の北西側丘陵上にも、同様な高まりとくぼみが存在することが、踏査の結果確認できた。これらの遺構も同様に城生柵跡の外側の外郭施設である可能性が考えられ、来年度以降さらなる調査を実施する必要がある。

小森遺跡は、高城川右岸の丘陵端部に所在する古代の遺跡である。個人住宅を建て替えるため予定地を確認調査し、10世紀後半頃の焼土遺構と遺物包含層を検出した。事業者の協力を得て、建築予定地に盛土し、遺構を保存した。

なお、事業者の協力を得て実施した確認調査や本発掘調査のうち内容が軽微だった、女川町浦宿B遺跡、登米市青島貝塚、亘理町大橋貝塚、柴田町西館館跡の成果も本書に併せて収録した。

浦宿B遺跡は、万石浦の最奥部北側の丘陵端部に立地する遺跡で、コンビニエンスストア建設に先立って確認調査を実施したところ、縄文時代前期の土器や獸・魚骨を多く含む包含層と平安時代の堅穴住居跡が検出された。そこで、再度協議し、事業者の協力を得て設計を変更し、遺物包含層部分は保存されることになった。

青島貝塚は、過去の発掘調査で大規模な貝層や多数の人骨が発見されている著名な貝塚で、市道改良に伴い確認調査を実施したもので、土器数点が出土したが、貝層や遺構は検出されなかった。

この他、以下の遺跡で確認調査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかった。

七ヶ宿町長老遺跡、川崎町大森遺跡、松島町瑞巖寺境内遺跡、大衡村金谷遺跡・上深沢遺跡、南三陸町伊里前牧野館跡隣接地、川崎町音無A遺跡、七ヶ宿町儘の上A遺跡

宮 城 県 全 図



ひがしやま かん が い せき
東山官衙遺跡周辺地区

目 次

第Ⅰ章 はじめに	3
第Ⅱ章 周辺地区の発掘調査	6
1. 調査の目的	6
2. 調査の方法と経過	6
3. 各地点の調査	9
(1) b 地点	9
(2) g 地点	14
(3) h 地点	17
第Ⅲ章 周辺地区的踏査	23
第Ⅳ章 自然科学的分析	26
第V章 総 括	29

引用・参考文献

写真図版

調 査 要 項

東山官衙遺跡周辺地区

所 在 地：宮城県加美郡加美町鳥屋ヶ崎、鳥嶋地区ほか

調査理由：重要遺跡確認調査

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

佐藤 則之 須田 良平

佐久間光平 佐藤 貴志 千葉 直樹 生田 和宏

調査期間：g・h 地点：平成17年6月6日～7月15日

b 地点：平成17年11月21日～11月30日

踏 査：平成17年12月6日～12月8日

調査面積：147m² (g 地点：30m² h 地点：86m² b 地点：31m²)

調査指導・協力：文化庁 宮城県多賀城跡調査研究所 東北歴史博物館 加美町教育委員会

大樹寺 伊藤明克 伊藤つよい 渋谷秀雄 千葉 覚

第Ⅰ章 はじめに

1. 東山官衙遺跡について

東山官衙遺跡は加美郡加美町鳥鵠地区から鳥屋ヶ崎地区に所在する、古代陸奥国賀美郡家と推定される遺跡である。県北の大崎平野の西端に位置し、奥羽山脈から分岐して南東に延びる標高80mほどの丘陵末端部に立地する（第1図）。

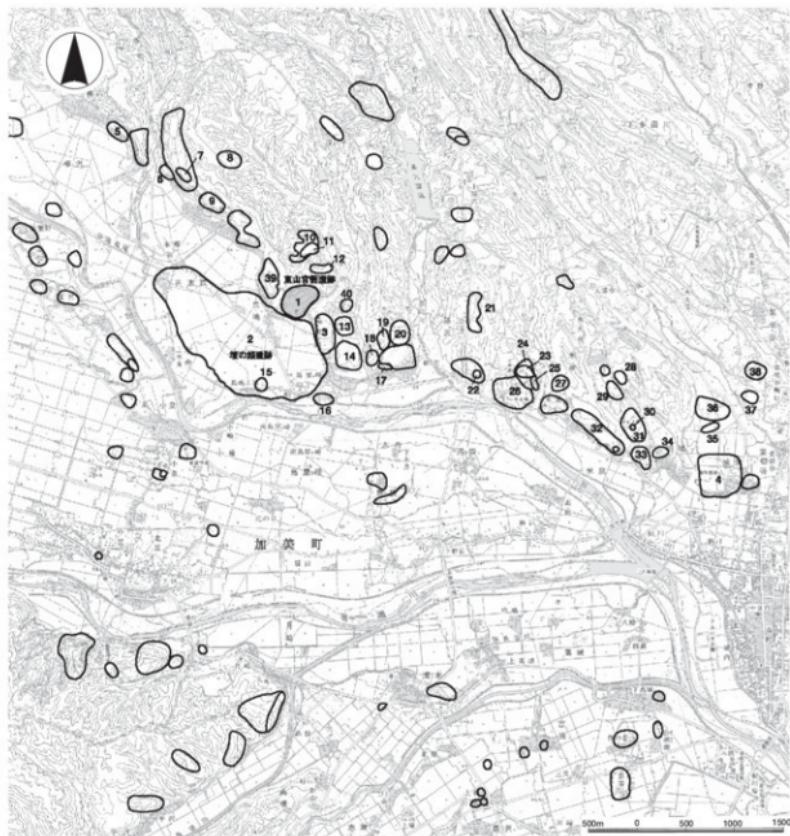
昭和61年から平成4年まで宮城県多賀城跡調査研究所が7次にわたる発掘調査を実施し、その後、平成5年～平成9年まで旧宮崎町教育委員会が8次～12次まで継続して調査を行い、これまでに以下のような点（宮崎町教育委員会 1998より抜粋・一部要約）が明らかになっている（第2図）。

- ①東山官衙遺跡は8世紀前半から10世紀中ごろまで存続した古代陸奥国賀美郡家とみられる。
 - ②官衙の周囲（台地縁辺）を築地塀で区画しており、台地を東西に二分する谷の入り口には南門（八脚門）がある。
 - ③南門の立地する小さな谷の北延長線上には幅約3m・深さ1.4mの南北方向の大溝があり、官衙を東と西に明瞭に二分している。
 - ④大溝の東側には郡庁院や館院のほか、厨院などの実務官衙が置かれていたと考えられる。郡庁院は8世紀末頃から10世紀初頭頃までおおよそ三度の建て替えが認められる。周囲を掘立柱の塀が巡っており、規模は東西57m・南北52mで、東西にやや長い正方形をしている。郡庁院を構成する建物には、正殿、東西の脇殿、正殿東建物がある。建物配置は正殿を中心として「コ」字状をなし、これらの建物に囲まれた区域は一辺約38mの正方形の広場を形成している。
 - ⑤大溝の西側の倉庫院は、南側には計画的に配置された倉庫群、その北側には多数の掘立柱建物群が存在する。倉庫跡からは火災を受けた多量の炭化米が発見されている。
- このように遺跡の規模・構造や重要性が明らかとなり、また遺跡の保存も良好なことから、平成11年には国史跡に指定されている。

2. 周辺の遺跡について

東山官衙遺跡の位置する大崎平野には数多くの遺跡が分布している。特に古代には律令国家の政治・軍事の拠点として城柵・官衙が多く造営されており、東から遠田郡田尻町新田柵跡、古川市宮沢遺跡（国史跡）、同市名生館官衙遺跡（国史跡）、加美郡加美町城生柵跡（国史跡）などが知られている。色麻柵と推定される城生柵跡は、当遺跡から東方へ約5kmの地点に位置している（第1図）。

遺跡のある丘陵南方に広がる河岸段丘面には、近年注目を集めている広大な「壇の越遺跡」がある（第3図）。平成8年度からの県営ほ場整備事業などによる継続調査（現在も調査中）によって、大きな成果が上げられている。これまでの調査では、①東山官衙遺跡の外郭南門から南に延びる南北大路を基準として、路心間の距離を1町とした計画的な地割りに基づいて造られていること、②南北・東西道路による方格地割りの成立は8世紀前半頃に遡る可能性があること、③8世紀後葉頃以降には、方格地割内の上位段丘面縁辺部に沿って築地塀・材木塀・門、櫓で構成される大規模な区画施設が造



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	歴史遺跡東山官衛遺跡	丘陵裏	古墳墓	古墳早・中、平安・中世	21	地形尾根遺跡	丘陵斜面	散布地	桃文・中、桃生・古墳・古氏・平安
2	埋立遺跡	段丘	集落	桃文・桃早・桃生・平安・若舊	22	地蔵前遺跡	丘陵裏	散布地	桃文早・中、桃生・古代
3	旱谷遺跡	丘陵斜面	集落	桃文・中、古墳・平安	23	古墳遺跡	丘陵斜面	散布地	桃文早・中、桃・古代
4	回文化城牛櫛跡	丘陵	住居・墓塚・廻文化	桃文・中、桃早・桃生・平安・中世	24	志賀山古墳群	丘陵	円墳・横穴巣	古墳後
5	鷹之巣跡	丘陵裏	散布地	古代	25	6.5ha山根六葉群	丘陵斜面	横穴巣	古墳後
6	大木木道跡	丘陵	散布地	古代	26	木道跡	丘陵	古墳・城館	古墳後・中世
7	上の道跡	丘陵	散布地	桃文・中、桃・古代	27	石船數遺跡	丘陵斜面	散布地	桃文前・中、桃・強生・古代
8	長い寺跡遺跡	丘陵	散布地	桃文・中、桃・平安・古墳・桃生・平安	28	利根野川古墳群	丘陵	古墳	古墳後
9	下ノ木道跡	丘陵	散布地	桃文早・中、桃・古墳・古氏・古墳	29	吉平道路	丘陵	散布地	桃文早・中・中、桃・古生・古墳・・古代
10	鳥谷・森古墳群	丘陵尾根	方墳	古墳後	30	森古森(大森森)古墳	丘陵	円墳	古墳前
11	古道遺跡	丘陵	散布地	桃文・古墳・桃早・平安	31	小山古道跡	丘陵	散布地	桃文早・中、桃・古墳・古墳・平安
12	鳥谷・森古墳	丘陵	散布地	桃文・古代	32	6.5ha古墳群	丘陵斜面	古墳	古墳中
13	愛宕山古墳群	丘陵斜面	方墳	古墳後	33	6.5ha遺跡	丘陵	散布地	古代
14	上の道跡	丘陵斜面	散布地	古墳・桃早	34	田畠道路	丘陵	散布地	古代
15	行人塙古墳群	段丘	古墳	古墳中	35	豫前A遺跡	丘陵裏	散布地	古代
16	足守門堂遺跡	段丘	散布地	桃文・中、桃・古代	36	足守門へ入り古道跡	丘陵	円墳・散布地	古墳後・古代
17	孫沢古墳群	丘陵裏	方墳	古墳後	37	田畠通り遺跡	段丘	散布地	古代
18	堺だれ山遺跡	丘陵斜面	散布地	桃文早・中、古代	38	大船道跡	丘陵	散布地	古代
19	上の草子山遺跡	丘陵斜面	散布地	桃文早・中、桃・桃生・古墳・平安	39	島崎船跡	丘陵	城館	中世
20	孫沢上の道跡	丘陵斜面	散布地	桃文早・桃生・古墳・古代	40	うこづ・たこづ遺跡	丘陵	散布地	桃文

第1図 東山官衛遺跡と周辺の遺跡

営されること、④方格地割内には、材木塀、溝によって区画された有力者の屋敷とみられる一角があること、などが判明している（加美町教育委員会 2005a、宮城県教育委員会 2005 ほか）。こうした調査結果から、壇の越遺跡の性格や重要性が明らかになるとともに、東山官衙遺跡とは一体の遺跡であることが明確になってきた。

一方、本遺跡の立地する丘陵近辺には、早風遺跡、上の山遺跡、鳥谷ヶ森遺跡などの古代遺跡がある（第1図）。これらのうち、東山官衙遺跡と沢をはさんだ東側丘陵部に立地する早風遺跡では、奈良・平安時代の竪穴住居跡25軒（調査は13軒）、掘立柱建物跡6棟などが検出されており（宮崎町教育委員会 1980）、やはり東山官衙遺跡との関連が指摘されている。

また、東山官衙遺跡がある丘陵上では、地元の研究者である板垣剛夫氏の綿密な踏査によって通称「女貞堀」といわれる“空堀状遺構”と“土塁”的存在が確認されている（宮崎町史編纂委員会 1973）。今回の調査の契機ともなるものであるが、昭和45年に板垣氏が作成した分布図には、東方の城生柵跡を中心として東山官衙遺跡方面へも延びる空堀・土塁とみられるラインが複数記載されている。東山官衙遺跡や城生柵跡との関連から注目されるものである。



第2図 東山官衙遺跡全体図 (S=1/4,000)

第Ⅱ章 周辺地区の発掘調査

1. 調査の目的

前にも述べたように、東山官衙遺跡と一連の遺跡である壇の越遺跡では、8世紀後葉以降に構築されたとみられる築地堀と大溝による大規模な区画施設が確認されており、これらは東山官衙遺跡の外郭施設の可能性が高まってきた（加美町教育委員会 2004a）。また、東山官衙遺跡周辺の丘陵上には“土壘状の高まり”や“堀状のくぼみ”が分布していることが以前から指摘されており（宮崎町史編纂委員会 1973），これらとの関連性についても追求する必要が出てきた。

そこで、宮城県教育委員会と加美町教育委員会では、丘陵部の“土壘状の高まり”や“堀状のくぼみ”について、これらの地点や規模などを実際に確かめるため、平成15年12月と平成16年3月の二度にわたり東山官衙遺跡周辺の丘陵上の踏査を実施した（宮城県教育委員会 2004）。その結果、14地点（a～n地点）において土壘状の高まりや堀状のくぼみを確認することができた（第3図）。これらの分布する地点や規模などを考えると、その一部は東山官衙遺跡と関連する可能性が高まってきた。

こうした経緯から、県教育委員会ではこれらの土壘状の高まりや堀状のくぼみについてその所属時期、構造・性格などを明らかにするため、今回、3地点（b・g・h地点）において発掘調査を実施することにした（第3図）。また、この発掘調査に併せて周辺地区的踏査を再度行い、全容の把握に努めることにした。

2. 調査の方法と経過

発掘調査は平成17年6月6日から開始した。3地点（b・g・h地点）のうち、まず、g地点の調査から着手した。g地点は道路沿いの尾根が切り通しとなっている区域で、現況では土壘状の高まりや堀状のくぼみは確認できないが、切り通し断面に堀状の落ち込みが認められることから、断面の土層の観察と記録を主目的とし、また、通路の削平部分においても遺構の有無の確認を行うことにした。切り通しの断面については、北面・南面の上層の観察を行い、堀跡とみられる落ち込みを確認し、これらの記録（実測・写真撮影）を行った。また、通路削平部分については切り通しの北面側に2.5m×11.0mのトレンチを設定して調査を行ったが、遺構は完全に削平されていることがわかった。g地点の調査は4日間ほどで終了した。調査面積は約30m²である。

引き続いでh地点の調査に着手した。この地点は山林であるが、現状でも丘陵上に2条の土壘状の高まりや1条の堀状のくぼみが東西方向に長さ120～150mにわたって確認できる。約1,500m²について伐採を行い、調査区はこれらの高まりやくぼみを南北に横断するよう幅4m×長さ24mで設定した。調査面積は86m²である。調査の結果、これらの高まりやくぼみは古代の土壘跡と堀跡であることが判明した。土壘跡など遺構の一部については断ち割りを行った。遺構の精査・記録は7月上旬には終了し、その後両地点の埋め戻しを行い、7月15日には調査を終了した。なお、7月3日（日）には現地説明会を開催（参加者約60名）、7月5日には文化庁の清野調査官の視察があった。

これら2地点の調査からは4ヶ月間ほど期間をおいてb地点の調査を実施した。調査期間は11月21



※ a～n 地点：—— 士塁跡もしくは土器状高まり

※ b・g・h 地点は発掘調査地点

第3図 東山官衙遺跡周辺地区と調査地点 (S=1/10,000)

日～11月30日、調査面積は31m²である。調査は幅1m×長さ28mと幅1m×長さ3mほどの狭いトレーニチ調査であったが、2条の土塁跡と1条の堀跡を確認した。堀跡には灰白色火山灰が堆積しており、土塁崩落土や堀跡の堆積土からは古代の土師器や須恵器片が少量出土した。後世の改変がみられるものの、この地点の土塁跡と堀跡も古代の遺構であることが明らかとなった。

これら3地点の調査終了後、12月6日～8日の3日間、東山官衙遺跡や東方約5kmの城生柵跡周辺域の踏査を実施した（第III章）。

なお、3地点の発掘調査時の調査区や遺構の平面図作成にあたっては電子平板を使用し、断面図については縮尺=1/20で作成した。平面図の作成にあたっての基準点（世界測地系にもとづく）は以下の通りである。

b 地点	BM b 1 : X = -155,546.997	Y = -2,205.945
	BM b 2 : X = -155,533.895	Y = -2,200.941
g 地点	BM g 1 : X = -156,089.570	Y = -2,331.972
	BM g 2 : X = -156,099.417	Y = -2,343.828
h 地点	BM h 1 : X = -155,242.502	Y = -2,763.588
	BM h 2 : X = -155,247.460	Y = -2,748.122

また、写真撮影には6×7モノクロフィルム・カラーリバーサルフィルム、35mmモノクロフィルム、デジタルカメラ（800万画素）を使用した。



写真1 h地点：調査状況



写真2 h地点：現地説明会（7月3日）

3. 各地点の調査

(1) b 地点

1) 現況と調査区

当地点は、東山官衙遺跡に隣接する東側丘陵上に位置し、この丘陵尾根から西へ高度を下げる斜面上にある。現状は雑木林であるが、東西方向に延びる長さ110～120mほどの2条の土壙状の高まりと、これに挟まれた1条の堀状のくぼみが明瞭に確認できる（写真3）。土壙状の高まりは1.0～2.0mほどの高さがあり、全体的に南側が高い。尾根上では、南側の土壙状の高まりは頂部に溝状のくぼみがあり、見かけ上は2条に分かれている（調査の結果、これは後世の改変によるものと判明）。堀状のくぼみは1.0～2.5mほどの深さである。

これらの東端部は町道によって切られているが、町道を挟んださらに東側でも延長線が確認できる。西端部は沢へ近づくにつれて徐々に不鮮明になり、痕跡が認められなくなる。



写真3 b 地点調査前の状況（東から）

調査区（幅1 m × 長さ28m、幅1 m × 長さ3 m）

は、尾根上の町道から西へ5 mほどの地点に南北方向に設定した。なお、調査では土壙跡などの遺構の断ち割りは行っていない。

2) 検出遺構と遺物

土壙跡2条、堀跡1条、柱穴1個などを検出した（第4図・第5図）。また、これよりも新しい時期の積土や溝跡も確認された。

①土壙跡

【SF01】2条ある土壙のうち、南側の土壙跡である。SD03堀跡へと続く北側はSD04溝跡によって切られている。また、北斜面部のSX05はSF01土壙を切り崩して形成した積土とみられる。南斜面部は比較的緩やかに傾斜している。残存する土壙の規模は、基底幅が約3.5m、高さが約1.0mである。断ち割りを行っていないが、土壙の上面ではにぶい褐色砂質シルトや明赤褐色砂質シルト（基盤の柳沢火碎流（早田2003）起源）などの積土（ⓐ～ⓒ）が認められる。

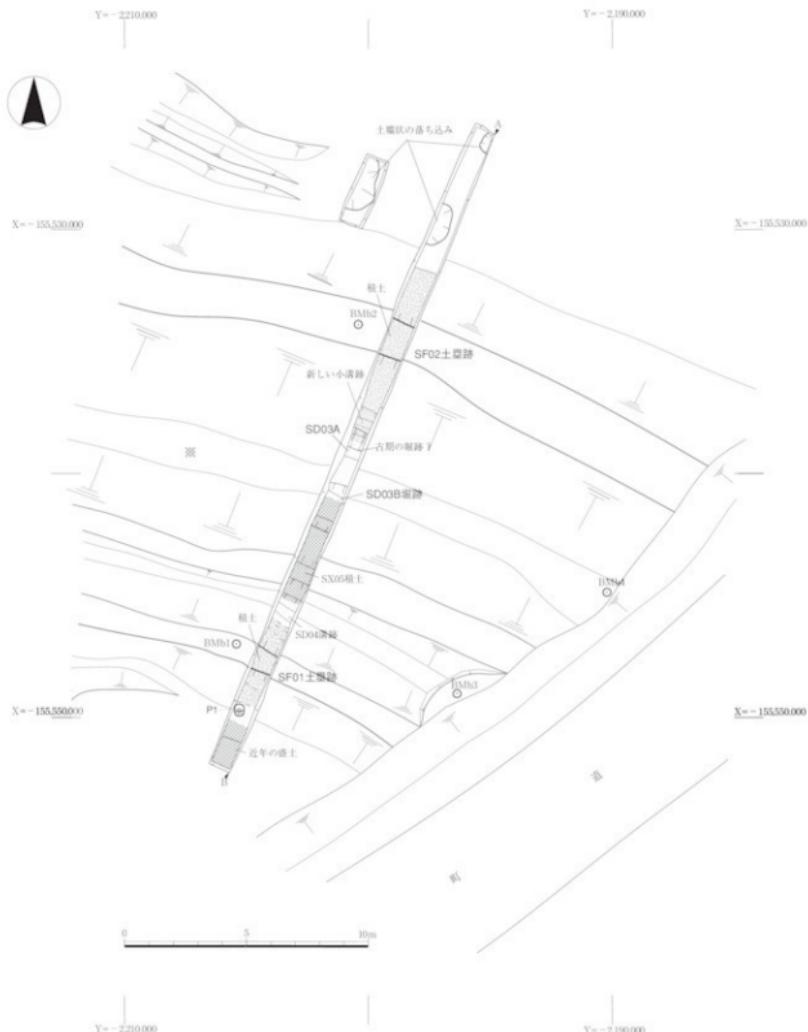
遺物は、土壙崩落土からロクロ調整の土師器環の小片などが出土している。

【SF02】北側の土壙跡である。北斜面部は緩やかな傾斜である。残存する土壙の規模は、基底幅が約5.5m、高さが60～70cmである。SF01と同様に断ち割りを行っていないが、上面では褐色粘土質シルトや明赤褐色砂質シルト（柳沢火碎流起源）などの積土（ⓐ・ⓑ）が認められる。

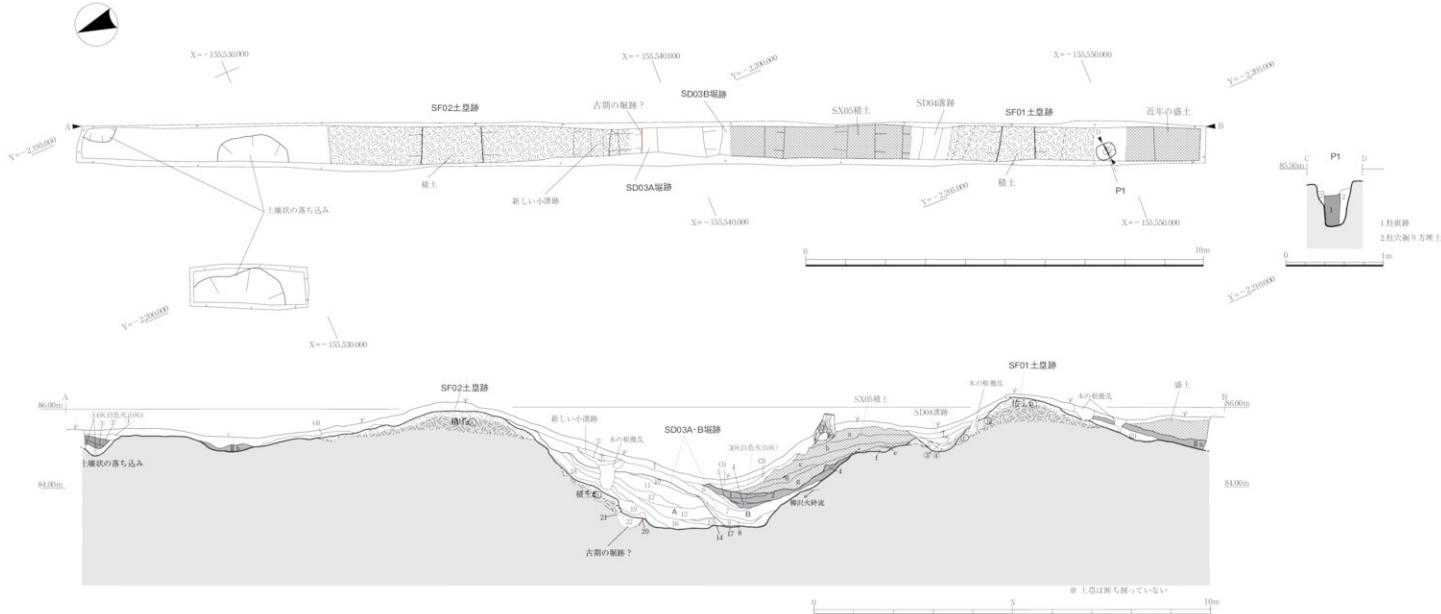
遺物は、土壙崩落土から須恵器環の口縁部小片、土師器小片などが出土している。

②堀跡

【SD03 A・B】SF01・SF02土壙跡の間に構築された堀跡である。一度掘り直しが認められ（A→B）、



第4図 b 地点調査区と遺構全体図 (S=1/200)



種	上	色	性	備	考
SN05-a	桔	(75YR4/3)	神賀シルト	人面、 面相、 面相、 面相	黒褐色(特徴)以下少量含む。
b	桔	(75YR4/3)	神賀シルト	人面、 面相、 面相、 面相	黒褐色(特徴)以下少量含む。
c	桔	(75YR4/3)	神賀シルト	人面、 面相、 面相、 面相	黒褐色(特徴)以下少量含む。
d	桔	(75YR4/3)	神賀シルト	人面、 全体に褐色(浅)、 黒褐色(特徴)以下比較多く含む。	
e	赤褐色	(5YR4/6)	神賀シルト	人面、 馬頭等輪郭線は朱色(濃)、 全体	小顎やくち。
f	桔	(75YR4/3)	神賀シルト	人面、 馬頭等輪郭線は朱色(濃)、 全体	小顎やくち。
g	桔	(75YR4/6)	神賀シルト	人面、 馬頭等輪郭線は朱色(濃)、 全体	小顎やくち。
SD04-1	黒	(75YR3/1)	神賀シルト	人面、 面相、 面相	黒褐色(特徴)以下少量含む。
a	黑	(75YR2/2)	シート	人面に黒色	
b	黑	(75YR2/2)	シート	人面に黒色	
c	黑	(75YR2/2)	神賀シルト	人面に黒色と黒土、 輪郭線(特徴)以下少量含む。	
d	桔	(75YR4/3)	神賀シルト	人面、 輪郭線(特徴)以下少量含む。	
e	新しき人面	(75YR4/3)	神賀シルト	人面、 輪郭線(特徴)以下少量含む。	
f	桔	(75YR4/4)	神賀シルト	口の形、 消化化物量含む。	
II 地獄地帯	桔	(75YR4/3)	シート	黒褐色(特徴)以下少量含む。	
III	桔	(75YR1/1)	シート	黒褐色(特徴)以下少量含む。	
IV	桔	(75YR1/1)	シート	黒褐色(特徴)以下少量含む。	
V	桔	(75YR1/1)	シート	黒褐色(特徴)以下少量含む。	
VI	桔	(75YR1/1)	シート	黒褐色(特徴)以下少量含む。	
7	人面(火炎火球)	(4YR4/8)	シート	厚さ1~2mmなど。 薄手シート。	
8	人面(75YR3/2)	シート	青褐色~黑色、 黒褐色シートと同色。		
SP01-1	人面(75YR3/3)	神賀シルト	明るい黒褐色シートに、 黒褐色シート。	黒褐色(特徴)以下少量含む。	
SP01-2	人面(75YR4/3)	シート	青褐色~黑色、 黒褐色シートと同色。	黒褐色(特徴)以下少量含む。	
SP02-1	人面(75YR4/3)	神賀シルト	黒褐色シートに、 黒褐色(特徴)以下少量含む。	黒褐色(特徴)以下少量含む。	
SP02-2	人面(75YR4/3)	神賀シルト	黒褐色シートに、 黒褐色(特徴)以下少量含む。	黒褐色(特徴)以下少量含む。	

第5図 b 地点遺構平・断面図 (S=1/100)

新期のSD03Bは旧期のSD03Aより南側に位置をずらしてほぼ同じ深さまで掘削されている。SD03Bの断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面幅は約1.0mである。SB03Aも底面がほぼ平坦で、底面幅は1.8m以上ある。

SD03Bの堆積土は、下部が黄橙色～赤褐色シルトブロックや凝灰岩小礫を不均質に含む褐色砂質シルト、上部は比較的均質な黒色～黒褐色砂質シルトなどを主体としており、上部には灰白色火山灰の堆積（最大厚約5cm）が認められる。SD03Aの堆積土はおむね黄橙色～赤褐色シルトブロックや凝灰岩小礫を不均質に含む褐色砂質シルトで構成されている。

遺物は、SD03Aの堆積土から須恵器環（第6図-1）、SD03Bの堆積土から須恵器壺の胴部小片が出土している。1の須恵器環は体下部～底部を回転ヘラケズリしている。

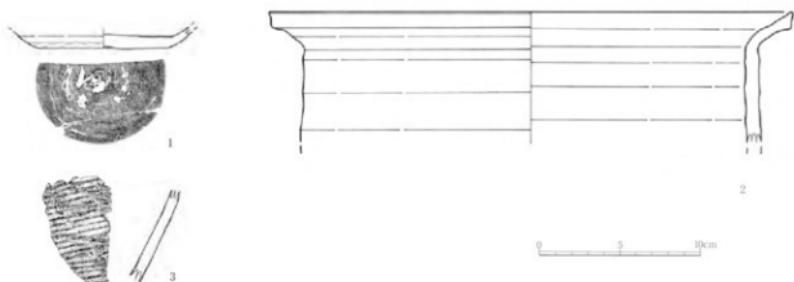
なお、SF03A底面のSF02土壙斜面側で、SF02土壙積土下からさらに古い遺構の痕跡が確認された。掘り下げを行っていないので詳細は不明であるが、後述するh地点と同様に、より古い段階の堀跡が土壙積土下に存在する可能性がある。

③柱穴

【P1】SF01土壙跡の南側の地山面で検出した。掘り方の平面形は隅丸方形状を呈する。大きさは長軸49cm・短軸30cmで、深さは45cmある。埋土は浅黄橙色粘土ブロックを不均質に含む褐色砂質シルトである。柱痕跡は径15cmほどの円形を呈する。

④その他

【SD04溝跡】SF01土壙跡よりも新しい。SX05積土とは同時期か、もしくはこれよりも新しいとみられる。上幅1.6～1.8m、深さ50～60cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は黒褐色～褐色砂質シルトの自然堆積によるものである。



No.	器種	遺構/層	残存	法量(cm)			特徴	固版	塑版
				口径	底径	高さ			
1	須恵器 環	SD03A堆積土	底部1/2	—	8.0	—	外：(口～体)ロクロナギ(下縁)回転ヘラケズリ　底部：不明→回転ヘラケズリ　内：ロクロナギ	8-3	b-12
2	須恵器 環	IIa	口縁1/4 (16.2)	—	—	—	内：ロクロナギ	8-2	b-1
3	須恵器 壺	IIa	胴部小片	—	—	—	外：(頸)平行タスキ　内：ナギ	8-3	b-2

第6図 b地点出土遺物

遺物は出土していない。

【SX05積土】SF01土壘跡の北斜面にあり、前述のSD04溝跡北側からSD03B堀跡の中央付近まで認められる。SD03B堀跡よりも新しい。積土の厚さは50cm～80cmほどで、赤褐色砂質シルトブロックや黒褐色砂質シルトブロックなどを不均質に含む砂質シルトで主に構成されており、硬くしまっている。SF01土壘を切り崩して構築したものとみられる。

遺物は出土していない。

【その他】SF02土壘跡の北側に土壤状の落ち込みが3基検出された。いずれも調査区に一部がかかつているもので、全掘していない。壁面はやや凹凸がある。上部の堆積土はいずれも黒色シルト～暗褐色砂質シルトなどの自然堆積によるもので、灰白色火山灰の堆積（最大厚15cm）が3基とも認められる。部分的な確認であったため、これらが人為的か自然のもの（倒木痕など）なのかは明確にできなかった。なお、SF01土壘跡南裾部には平坦面がみられるが、この平坦面は近年の盛土（黒色シルトや黄褐色粘土ブロックが混じる土）によるものとみられる。

遺物は、上記以外にはSF01土壘跡南側の旧表土層（IIa）から須恵器鉢（第6図-2）、須恵器甕の胴部片（第6図-3）、現表土から須恵器坏の底部小片、珪質頁岩製のスクレーバー（図版8-⑤）などが出土している。

（2）g 地点

1) 現況と調査区

東山官衙跡から南東側へ600mほど離れた、南へ延びる丘陵の尾根先端部に位置する。雑木林のため現状での観察が難しいが、南北に走る町道沿いの右手側に土壘状の高まりと堀状のくぼみの一部がわずかに確認できる地点がある。ここから北側へ20～30mほどの地点に尾根が切られている場所（写真4）があり、今回、この区域で調査を行った。

調査は、この切り通しの北面と南面の断面観察を中心行った。削平面については、遺構の有無を確認するため一部掘り下げた区域がある（第7図）。



写真4 g 地点調査前の状況（南西から）

2) 検出遺構と遺物

切り通しの断面観察を中心とした調査のため明確ではないが、切り通しの北面と南面からそれぞれ堀跡とみられる遺構2条、その他3条ずつを確認した（第8図）。土壘の痕跡は確認できなかった。

なお、地山は一部を除いて白色～黄色軽石・凝灰岩小礫などを含む柳沢火碎流であり、遺構はこの基盤層を掘り込んでいる。

〈北面〉

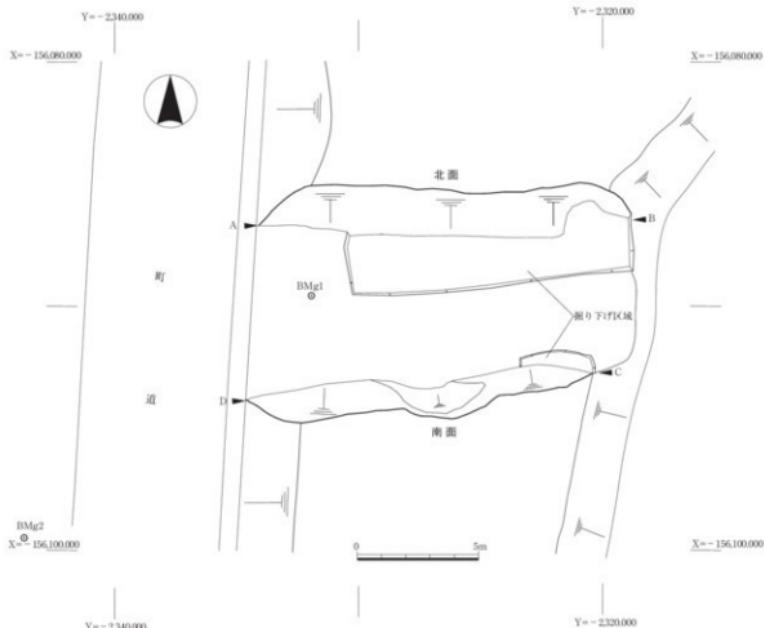
①堀跡

【SD101a】 SD102a、SX103aと重複し、これらよりも新しい。規模は上幅約2.1m、深さ約1.2m、断面形はU字形を呈する。堆積土は最上層が旧表土層とみられる黒色土、下位には黄褐色土や白色軽石を含む褐色シルト～にぶい黄褐色砂質シルトなどの自然堆積によるものが認められる。黒色土の下には灰白色火山灰ブロックがわずかに観察される。堆積土から土師器窯の胴部とみられる小片が1片出土している。

【SD102a】 SD101aの東側に位置し、SD101aよりも古く、SX103a、SX104a、SX105aよりも新しい。規模は上幅5.1m以上・深さ1.9m以上である。東の壁面側は流失した可能性が高い。堆積土は最上層が旧表土の黒色土、下位は黄褐色土ブロックや白色軽石を多く含む褐色～にぶい黄褐色砂質シルトなどを主体とし、下位には焼土ブロックや炭化物粒からなる薄層も観察される。いずれも自然堆積土とみられる。堆積土からは土師器の小片が2片出土している。

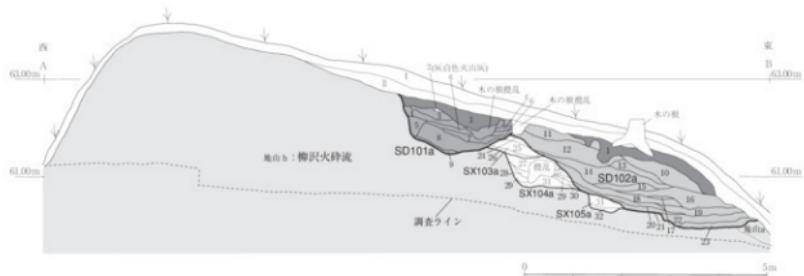
②その他

前述のSD101a・SD102aよりも古い遺構で、SX103a、SX104a・SX105aとしたものがある。堆積土

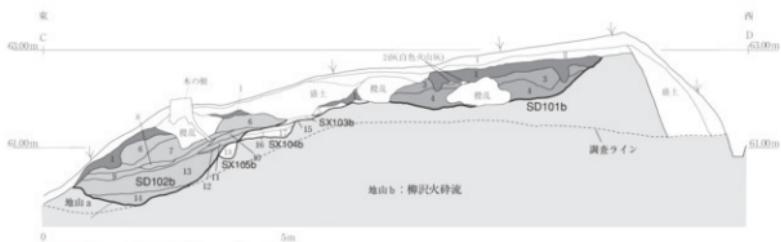


第7図 g 地点調査区 (S=1/200)

《北面》



《南 雨》



属	上色	主性	備考	属	上色	主性	備考
I	表土 泥炭 (H02R-2)	シルト シルト	なし。 表面に難集層。	10	緑 (H07R-4)	白色粘土 (H0mL-D)。 緑色シルトブロックを含む。	
II	表土 泥炭 (H04R-4)	シルト シルト	なし。	11	緑 (H07R-4)	白色粘土 (H0mL-D)。 緑色シルトブロックを含む。	
III	表土 泥炭 (H02R-2)	シルト シルト	なし。	12	S0102s (原生色泥炭)	シルト シルト	地表上より、炭化植物多く含む。
?	(原生色泥炭)	—	グリック層にわずかに認められる。	13	シルト シルト	シルト (H05R-5) 白色粘土 (H0mL-D)。 白色シルトブロックを含む。	
3	緑 (H07R-4)	シルト シルト	白色粘土 (H0mL-D)。 白色シルトブロックを含む。	14	緑 (H07R-4)	白色粘土 (H0mL-D)。 白色粘土ブロックを含む。	
4	表土 泥炭 (H02R-2)	シルト シルト	白色粘土 (H0mL-D)。 白色シルトブロックを含む。	15	S0102s (原生色泥炭)	シルト (H07R-4) 白色粘土 (H0mL-D)。 人為的、炭化植物多く含む。	
5	緑 (H07R-4)	シルト シルト	シルトブロックを含む。	16	緑 (H07R-4)	シルト (H07R-4) 人為的、炭化植物多く含む。	
6	緑 (H07R-4)	シルト シルト	シルトブロックを含む。 なし。	17	S0104s 泥炭 (H07R-5)	シルト シルト	人為的、炭化植物 (シラフ) 下部に炭化土 壤土ブロックを含む。
7	緑 (H07R-4)	シルト シルト	シルト (H0mL-D)。 黄色シルトブロックを含む。	18	S0105s (原生色泥炭)	シルト (H07R-4) 白色粘土 (H0mL-D)。 白色シルトブロックを含む。	
8	(原生色泥炭) 緑 (H03R-3)	シルト シルト	白色粘土 (H0mL-D)。 黄色シルトブロックを含む。	19	緑 (H07R-4)	シルト (H07R-4) 白色粘土 (H0mL-D)。 白色シルトブロックを含む。	
9	緑 (H03R-3)	シルト シルト	白色粘土 (H0mL-D)。 黄色シルトブロックを含む。	20	緑 (H07R-4)	シルト (H07R-4) 白色粘土 (H0mL-D)。 白色シルトブロックを含む。	

第8図 q地点断面図 (S=1/100)

は黄褐色土ブロックを多く含む褐色砂質シルトなどを主体とするもので、大半は硬くしまっている。

人為的に埋め戻されたものか、あるいは一部は積土である可能性もある。

《南面》

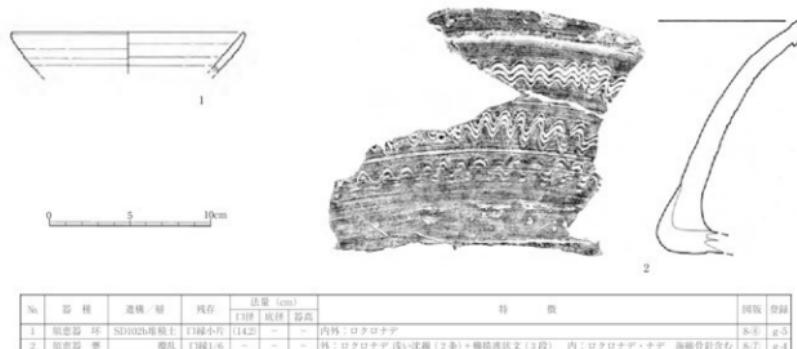
①堀跡

【SD101b】北面のSD101aに対応するとみられる。規模は上幅4.3m以上、深さ約80cmである。堆積土は最上層が旧表土層とみられる黒色土、下位には黄褐色土や白色軽石を含む褐色シルト～にぶい黄褐色砂質シルトなどの自然堆積によるものが認められる。北面のSD101aと同様、黒色土の下には灰白色火山灰ブロックがわずかに観察される。中央の擾乱部から、頸部に2条の沈線と3段の櫛描波状文がみられる須恵器窓の口縁部片（第9図-2）が出土している。

【SD102b】SD101bの東側に位置し、SX103b・SX104b・SX105bと重複し、これよりも新しい。北面のSD102aに対応するとみられる。規模は上幅4.4m以上、深さ1.8mほどである。堆積土は最上層が旧表土の黒色土、下位は黄褐色土ブロックや白色軽石を多く含む褐色～にぶい黄褐色砂質シルトなどを主体とし、SD102aと同様、下位には焼土ブロックや炭化物粒からなる薄層も観察される。いずれも自然堆積土とみられる。堆積土からは須恵器窓の口縁部片（第9図-1）が出土している。

②その他

SD102bよりも古い遺構で、SX103b・SX104b・SX105bとしたものがある。北面のSX103a・SX104a・SX105aにそれぞれ対応するものと考えられる。北面と同様に、堆積土は黄褐色土ブロックを多く含む褐色砂質シルトなどを主体とするもので、いずれも硬くしまっている。



第9図 g地点出土遺物

(3) h地点

1) 現況と調査区

当地点は、東山官衙遺跡とは沢を挟んだ北側の西へ延びる丘陵上に位置し、この丘陵の尾根から西斜面上にある。現状は雜木林と一部杉林になっているが、東西方向に延びる総長120～150mほどの2

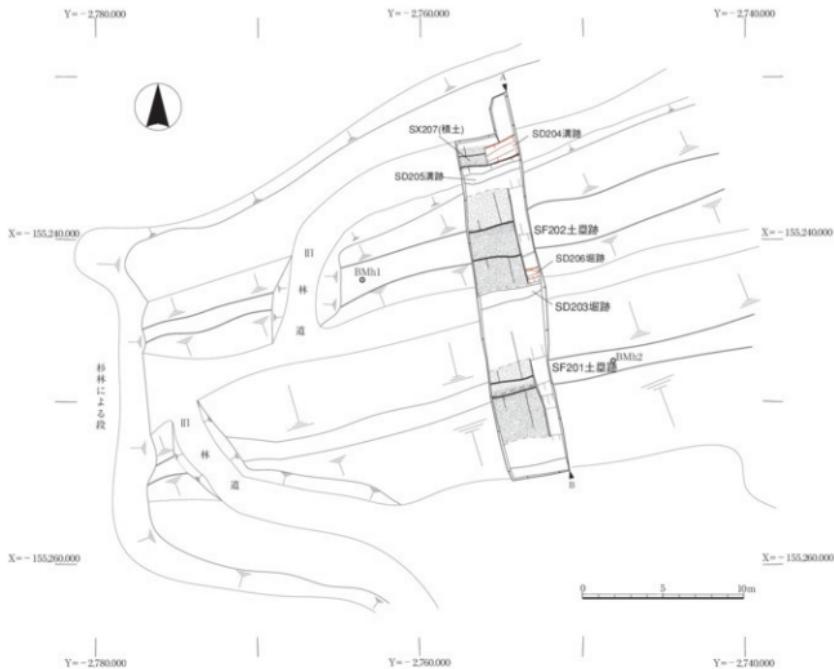
条の土壠状の高まりと、これらに挟まれた1条の堀状のくぼみが明瞭に確認できる（写真5）。土壠状の高まりは、高さが北側は1.0~2.0m、南側は1.0~3.0mほどあり、全体的に南側が高い。堀状のくぼみは1.0~1.5mほどの深さである。

土壠状の高まりの東端部は南側がi地点との境にある林道付近まで認められるのに対し、北側はかなり手前で不鮮明になる。両方の高まりとも西端部は沢の手前の杉林で途切れている。西端部および北側の高まりの北辺は部分的に旧林道によって削られている。

調査区（幅4 m×長さ24m）は、西斜面上に土壠状の高まりと堀状のくぼみを横断するよう南北方向に設定した。なお、調査では土壠跡などの遺構の断ち割りを部分的に行った。



写真5 h地点調査前の状況(西から)



第10図 h地点調査区と遺構全体図 (S=1/300)



	品	上	色	上	色	性	考
SF201黒系	-	h	にじ 黄緑 (10YR 4/5)	御 色シルト	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。	
		i	暗 黄 (10YR 4/6)	御 色シルト	黄色系 (Hue 10/100)	を多く含む。	
		j	暗 黄 (10YR 4/4)	御 色シルト	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。	
SF202銀系	a	にじ 黄緑 (10YR 4/5)	御 色シルト	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	b	にじ 黄緑 (10YR 4/6)	御 色シルト	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	c	暗 黄 (10YR 4/4)	御 色シルト	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	d	暗 黄 (10YR 4/6)	御 色シルト	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	e	暗 黄 (10YR 4/6)	御 色シルト	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	f	暗 黄 (10YR 4/4)	シルト質銀	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	g	暗 黄 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	h	暗 黄 (10YR 4/2)	シルト質銀	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
銀系	i	暗 黄 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	j	暗 黄 (10YR 4/4)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
白銀系	a	にじ 黄緑 (10YR 4/5)	御 色シルト	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	b	にじ 黄緑 (10YR 4/6)	御 色シルト	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	c	暗 黄 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	d	暗 黄 (10YR 4/4)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	e	暗 黄 (10YR 4/4)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	f	暗 黄 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	g	暗 黄 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
銀地銀系	a	にじ 黄緑 (10YR 4/5)	御 色シルト	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	b	にじ 黄緑 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	c	暗 黄 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	d	暗 黄 (10YR 4/4)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	e	暗 黄 (10YR 4/4)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	f	暗 黄 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	g	暗 黄 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
銀地白銀系	a	にじ 黄緑 (10YR 4/5)	御 色シルト	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	b	にじ 黄緑 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	c	暗 黄 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 0/100)	を多く含む。		
	d	暗 黄 (10YR 4/4)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	e	暗 黄 (10YR 4/4)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	f	暗 黄 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		
	g	暗 黄 (10YR 4/6)	シルト質銀	白色系 (Hue 10/100)	を多く含む。		

番号	名前	色	毛性	備考
S0203-1	にかわく(10YR4/3)	シルト		
2	にかわく(10YR4/3)	シルト		
3	にかわく(10YR4/3)	シルト		褐色の土色、黄色ブロッケを含む。
4	にかわく(10YR4/3)	シルト		褐色の土色、黄色ブロッケを多く含む。
5	ぬく(10YR3/2)	シルト		
6	黒泥(10YR3/2)	シルト		
7	ぬく(10YR3/2)	シルト		褐色の土色、白色土を含む。
8	ぬく(10YR3/2)	シルト		褐色の土色、白色土(約1cm以下)を含む。
9	ぬく(10YR3/2)	シルト		褐色の土色、白色土ブロック(約1cm以下)を含む。
10	ぬく(10YR4/3)	シルト		
11	ぬく(10YR4/3)	シルト		褐色の土色を含む。
12	ぬく(10YR4/3)	シルト		褐色の土色、白色土を含む。
13	ぬく(10YR4/3)	シルト		褐色の土色を含む。
14	にかわく(10YR4/3)	シルト		褐色の土色、白色土(約1cm以下)を含む。砂を含む。
15	にかわく(10YR4/3)	シルト		褐色の土色、黄色の土色(1cm以上)を含む。
16	にかわく(10YR4/3)	シルト		褐色の土色、白色土(約1cm以上)を含む。
17	ぬく(10YR4/3)	シルト		褐色の土色、白色土(約1cm以上)を含む。
18	ぬく(10YR4/3)	シルト		褐色の土色、白色土(約1cm以上)を含む。
S0204-1	にかわく(10YR4/4)	シルト		
2	ぬく(10YR4/4)	シルト		褐色の土色、炭化物を含む。
3	にかわく(10YR4/4)	シルト		
4	ぬく(10YR4/4)	シルト		
5	ぬく(10YR3/3)	シルト		褐色の土色、炭化物を含む。
S0205-1	ぬく(10YR2/2)	シルト		褐色の土色を含む。
2	にかわく(10YR4/3)	シルト		褐色の土色を含む。
3	ぬく(10YR4/6)	シルト		褐色の土色、砂粒、輕石を多く含む。
S0206-1	ぬく(10YR4/6)	シルト		褐色の土色を含む。
2	ぬく(10YR4/6)	シルト		褐色の土色を含む。
3	にかわく(10YR4/6)	シルト		褐色の土色を含む。
4	にかわく(10YR5/5)	シルト		褐色の土色(約1cm以下)を含む。
5	にかわく(10YR5/5)	シルト		褐色の土色(約1cm以下)を含む。
6	にかわく(10YR5/5)	シルト		褐色の土色、白色土を含む。
7	にかわく(10YR5/5)	シルト		褐色の土色、白色土を含む。
8	にかわく(10YR5/5)	シルト		褐色の土色、白色土(約1cm以下)を含む。
9	ぬく(10YR5/5)	シルト		褐色の土色、白色土(約1cm以下)を含む。
10	ぬく(10YR5/5)	シルト		褐色の土色、白色土(約1cm以下)を含む。
11	にかわく(10YR5/5)	シルト		褐色の土色を含む。
12	にかわく(10YR5/5)	シルト		褐色の土色を含む。
13	ぬく(10YR5/5)	シルト		褐色の土色を含む。

第11図 h 地点遺構平・断面図 ($S = 1/100$)

2) 検出遺構と遺物

東西方向に並行して延びる土塁跡 2 条、堀跡 2 条・溝跡 2 条などを確認した（第10図・第11図）。

① 土塁跡

【SF201】 2 条ある土塁のうち、南側の土塁跡である。南側裾部は並行して走る旧林道によって若干削られている。規模は基底幅が 5.0~7.0m、残存高は約 3.0m である。土塁頂部は地山の黄褐色シルト層、斜面部は基盤の柳沢火碎流まで削り込んで積土をしている。積土は左右では不整合が認められ、土塁の修復（積み直し）があつたものと考えられる。左側（旧期）は白色軽石を含むにぶい黄褐色砂質シルト（火碎流起源）などを主体にした積土（ⓐ～ⓒ）、右側（新期）は黄色軽石を含むにぶい黄褐色～黄橙色砂質シルト（火碎流起源）などを主体にした積土（ⓐ～ｊ）が中心である。南斜面部では基盤の柳沢火碎流を削り込んで幅 1.2~1.3m ほどの段が形成されているが、これは旧期の土塁構築時のものとみられる。

遺物は、旧積土から土師器小片、新崩落土から須恵器甕胴部片、土師器小片などが出土している。

【SF202】 北側の土塁跡である。規模は基底幅が 5.0~5.5m、残存高は 1.3~1.5m である。南側の SF201 と比べると、調査地点では SF201 より高さが約 2.5m 低く、頂部は全体的にややなだらかである。積土は左右では不整合が認められ、SF201 と同様に土塁の修復（積み直し）があつたものと考えられる。左側（旧期）は白色軽石を含む黄褐色～褐色砂質シルト（火碎流起源）などを主体にした積土（ⓐ～ⓓ）、右側（新段階）は黄色軽石を含むにぶい黄褐色～褐色砂質シルト（火碎流起源）などを主体にした積土（ⓐ～ｈ）が中心である。構築に際しては、旧段階では旧黒色土の上面に積土をしているが、新期では基盤の柳沢火碎流まで削り込んで積土を行い、これと同時に旧段階とみられる SD206 堀跡上部にも積土をしている。

遺物は、新積土から須恵器蓋小片、土師器小片などが出土している。

② 堀跡

【SD203】 SF201 と SF202 土塁跡の間にある。SD206 堀跡よりも新しく、これよりも約 1m ほど南へずれた位置にある。規模は上幅 2.8~3.0m・底面幅は 0.2~0.8m で、断面形はおおむね V 字状を呈する。堀底面の深さは SD206 とほぼ同じで、SF201 土塁頂部からは深さが約 4.5m である。構築時には、南壁の SF201 土塁側では旧段階の土塁崩落土と考えられるにぶい黄褐色～黄橙色シルトや基盤の柳沢火碎流を削り込んでいる。

堆積土は上位が黄色土ブロックや白色軽石を含む褐色～暗褐色砂質シルト、中位が黒色～黒褐色シルト、下位が褐色～にぶい黄橙色砂質シルト・砂を主体としている。下位の下半部は水成堆積土である。中位の黒色土下部には灰白色火山灰ブロック（第Ⅳ章の火山灰分析を参照）が認められる。

遺物は、堆積土から土師器甕の胴部片とみられる小片が出土している。

【SD206】 SF202 土塁の新積土、SD205 堀跡よりも古い。南壁側を SD203 堀跡、北壁側を SF202 土塁の新積土に伴う削り込みで切られている。残存する上幅は約 1.2m で、断面形は V 字状を呈する。

堆積土は上半が黄色～白色軽石を含む褐色～にぶい黄橙色シルト質砂の自然堆積土、下半がラミナ状の砂層を主体とする水成堆積土である。

遺物は出土していない。

③溝跡

【SD204】 SF202土壙跡の北辺裾部に沿っている。SX207積土・SD205溝跡よりも古い。残存する上幅は約1.4m、深さ50cmほどで、断面形は浅いU字形を呈する。

堆積土は、白色～黄色軽石を含む褐色砂質シルトを主体とする自然堆積土や褐色シルト質砂の水成堆積土で構成されている。上部には黄色～白色軽石を含む褐色砂質シルト主体の積土（SX207）がある。

遺物は出土していない。

【SD205】 SD204溝跡と同様、SF202土壙の北辺裾部に沿っており、SD204溝跡よりも新しい。残存する上幅は約1.5m、深さ50cmほどで、断面形はU字形を呈する。

堆積土は、黄色土粒などを含む褐色～黒褐色砂質シルト・シルトを主体とする自然堆積土である。

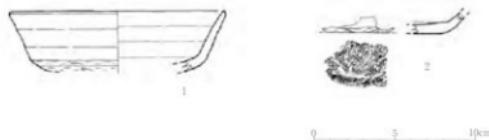
遺物は出土していない。

④その他

【SX207】 SD204溝跡の上部に認められる積土である。幅1.4m、厚さ40～50cmほどで、若干の高まりをもつ。積土は褐色砂質シルト～シルト質砂などで構成されており、しまりがある。SD205溝を造る際に、SD204溝を埋め戻しながら構築した小規模な積土とみられる。

遺物は出土していない。

【その他の遺物】表土層などから、須恵器坏（第12図-1・2）、土師器壺の胴部小片、また、縄文土器（図版8-13）、石匙・尖頭器（図版8-14・15）なども若干数出土している。



No.	器種	遺構／層	残存	法量(cm)	特徴	図版	登録
1	須恵器 壁	耕土	1/10	(13.4) - -	外：ロクロナデ（下端）回転ハラケズリ 内：ロクロナデ	8-9	b-7
2	須恵器 壁	耕土	瓶小片	- - -	外：（下端）手持ちハラケズリ 瓶：静止系切り・手持ちケズリ 内：ロクロナデ	8-10	b-11

第12図 h 地点出土遺物

第Ⅲ章 周辺地区の踏査

1. 踏査の目的と方法

前述したように、東山官衙遺跡周辺の丘陵上の“土壘状の高まり”や“堀状のくぼみ”^(注1)の位置や規模などを確かめるため、平成15年12月と平成16年3月に踏査を実施し、少なくとも14地点においてこれらを確認した。今回の発掘調査はこの踏査結果を踏まえて実施されたものであるが、これら3地点の発掘調査の所見をもとに、改めて東山官衙遺跡周辺の踏査を行うとともに、東山官衙遺跡東方約5kmにある国史跡城生橋跡周辺でも同様の土壘状の高まりや堀状のくぼみが存在しないかどうかを確かめるため、平成17年12月6日～8日の間に踏査を行った。踏査で確認した遺構については縮尺=1/10,000地形図へ記入し、遺構の状況をデジタルカメラ（800万画素）で記録した。

2. 東山官衙遺跡周辺地区

踏査は、東山官衙遺跡の北側から東側・西側の丘陵地を中心に行なった。前回確認していたa～n地点までの14地点の再確認のほかに、特に西側丘陵地での遺構の有無を確認することにした。

踏査の結果、新たな土壘状の高まりや堀状のくぼみは確認できなかったが、北～東側にかけての状況がより明確になるなど、新たな所見が得られた（第3図）。a～g地点の状況については既に報告しているので（宮城県教育委員会 2004）、ここでは前述のh地点を除いてi地点からn地点までの6地点の状況を追記し、a～n地点を含めた周辺域全体の状況について概要を述べる。

【i 地点】東山官衙遺跡の北辺から北へ約300mの地点にある。丘陵頂部の平坦面から西斜面部にかけて明瞭な2条の土壘状の高まりと1条の堀状のくぼみが東西方向に総長100～120mほど認められる。西端は斜面に沿って下り、林道で一旦途切れるが、その延長線上にはh地点がある。東端は東から入る沢頭付近で不明瞭になるが、丘陵縁辺に沿って南側のk地点に向かう途中ではごくわずかな高まりやくぼみ、段状になった狭い平坦面が認められる。土壘状の高まりは北側が高さ約1m、南側は1～1.5mで、南側が高い。堀状のくぼみは深さが50cm～1mほどである（図版9-1・2）。南側の高まりは、中央よりやや東寄りの部分が南へ開くような形状（幅約13m）をもつ。現状では、本来的に開いていたのか、後世の改変によるものは不明である。なお、西側には径27m、深さ5～6mほどの大規模な円形の穴（通称：穴倉）があり、北側の土壘状の高まりを一部切っている。

【j 地点】東山官衙遺跡北辺と前述のi地点の間の狭い丘陵の尾根上にある。南北方向の1条の土壘状の高まりが総長20～30mほど確認できる。高さは50cm～1mほどで、西辺に沿ってわずかな堀状のくぼみも認められる。

【k 地点】東山官衙遺跡北東隅から北東側へ100mほど離れた丘陵の南斜面上にある。明瞭な2条の土壘状の高まりと1条の堀状のくぼみが南北方向に総長50～60mほど認められる。南端は沢に向かい途切れるが、沢を越えるとb地点へ至る。北端は丘陵縁辺に沿って北へ延びていくが、途中から高まりやくぼみが不明瞭になり、その延長線上は狭い平坦面の段（2～3段）に変化している。土壘状の高まりは西側が高さ2～3m、東側が1mほどで、南側が高い。堀状のくぼみは深さ1～2mほどであ

る（図版9-4）。なお、k地点と北側のi地点との間にある林道の露頭面では、堀跡3条（灰白色火山灰を含むものあり）、柱穴1個などが確認できた（図版9-5～8）。

【i地点】b地点の北側にある。高さ1mほどの土壘状の高まりが隅丸方形状に巡っている。長軸70～80m、短軸50～60mほどの規模で、土壘状の高まりに囲まれた内部は平坦になっている。

【m地点】c地点とT字形に交差する、南北方向の1条の土壘状の高まりと堀状のくぼみを総長50～60mほど確認した。高まりの高さは1m弱、くぼみの深さは50～60cmほどで小規模である。

【n地点】b地点とは町道を挟んだ東側の丘陵上にある。丘陵頂部から沢筋の落ち際にそって東へ延び、途中から丘陵頂部の縁辺を南へと下る土壘状の高まりと堀状のくぼみを確認した。西端部ではb地点から続く2条の土壘状の高まりと1条の堀状のくぼみが確認できる。しかし、東へ向かうにつれて不鮮明になり、南側の高まりは丘陵頂部縁辺で南北方向に再び総長40～50mほど（高さ50cm～1mほど）認められるものの、北側の高まりや堀状のくぼみは丘陵の北～東斜面を取り巻く幅2mほどの狭い平坦面（段）へと続いている（図版10-1・2）。そして、これらの高まりや狭い平坦面（段）は南へ向かうにつれて再び不鮮明になり、その先の南側では確認できなくなる。

前回と今回の踏査結果から、東山官衙遺跡周辺の土壘状の高まりや堀状のくぼみについて以下のようない点が指摘できる。

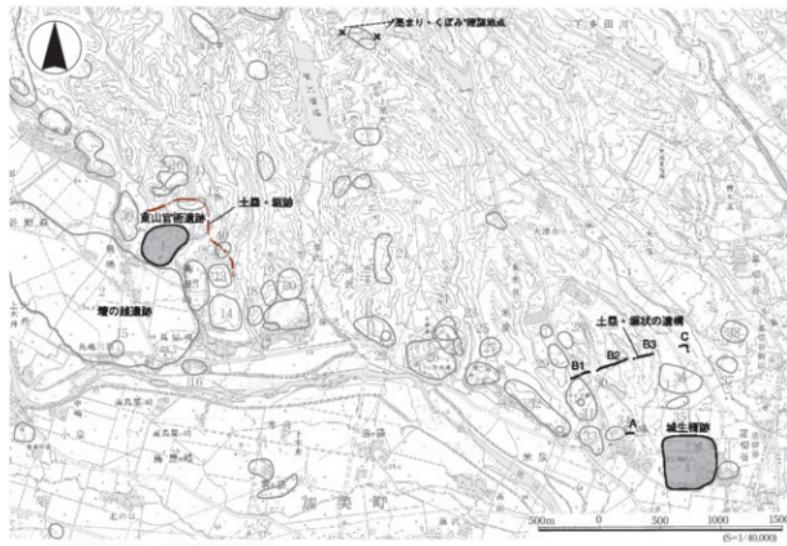
- ①東山官衙遺跡の北側から北東側にかけては、基本的に2条の土壘（南側が高い）と1条の堀跡がh（調査）-i-k-b（調査）-n地点とつながるものと考えられる。
- ②東側丘陵地では北側から続く土壘と堀跡がn地点まで確認できるが、これより以南については不明である。e地点で確認できる土壘状の高まりは1条のみで、2条の土壘と1条の堀跡が認められるh-n地点のものに比べ小規模であり、n地点とつながるものとは考えにくい。
- ③h地点と沢を挟んだ西側の丘陵地では確認できなかった（この丘陵地には中世の「鳥嶋館跡」があり、館の土壘や堀・平場などは認められる）。
- ④東側丘陵地のg地点の堀跡（露頭面調査）は、d地点の土壘状の高まり・堀状のくぼみとつながる可能性がある。両地点の間には高さ1mほどの段としての痕跡が認められる。
- ⑤上記以外のa・c・j・m・l・f地点は、規模や形状がh-n地点のものとは異なっており、別時期かもしれない性格が違う可能性がある。

なお、東山官衙遺跡の北東約2kmの孫沢溜池近辺やその南側丘陵地についても踏査を行い、2地点で土壘状の高まりと堀状のくぼみを確認した（図版10-3～8）。ただし、その位置や形状・規模などからみると、これらは近年の掘削や盛土である可能性が高いと考えられる。

3. 城生柵跡周辺地区

城生柵跡の北西部から北側の丘陵地を中心に踏査を行い⁽²³⁾、3ヶ所で土壘状の高まりや堀状のくぼみを確認した（図版10-3～8）。

【A地点】城生柵跡の西方約300mの地点で、南へ延びる低平な丘陵の末端部にある。古代の羽場遺跡がある杉林付近に、1条の土壘状の高まり（高さ約1m）とその北側に沿う堀状のくぼみ（深さ1～



第13図 東山宮跡と城生柵跡周辺域

2 m) が東西方向に総長100mほど認められる。ただ、土壙状の高まりは部分的に寸断されており、堀状のくぼみも一部は明瞭であるが、西側へいくにつれて不鮮明になる。

【B地点】 城生柵跡からは0.8~1.0kmほど離れた北西部の丘陵地にある。東西方向に直線的に延びる明瞭な1条の土壙状の高まりと北側に沿う1条の堀状のくぼみ(B1~B3)が確認できた。沢地では一旦途切れるが、総長約700~800mほど続く大規模なものである。土壙状の高まりは高さが1~2 m、堀状のくぼみは深さが1~2 mほどある。西端および東端はそれぞれ沢の斜面部で不鮮明になる。その延長線がどのように展開するかは未確認である。

【C地点】 Bの東端延長線上の丘陵地にある。丁形に屈曲する土壙状の高まり(高さ約2 m)と堀状のくぼみ(深さ1~2 m)がある。北辺・東辺とも20~30mほど残存している。Bのほぼ東側延長線上にあるが、やや北寄りに位置していることや形状・規模がBとは異なることから、CとBは連結するものではないと考えられる。

註1 第I章でも述べたように、板垣剛夫氏が昭和45年に作成した遺跡分布図には、東山宮跡周辺から東方の城生柵跡周辺にかけて分布する土壙や空堀(通称:女貝塚)の記載がある(宮崎町史編纂委員会 1973)。

註2 註1の分布図には、孫沢溜池の北側地点にも「女貝塚遺構」の記載があることから、今回の踏査範囲に加えた。

註3 今回の踏査は、周辺域を網羅しているわけではなく一部区域に限られている。板垣氏が作成した分布図では「女貝塚遺構」は4線(細分5線)記載されているが、今回確認したB地点はそのうちの第二線に相当するとみられる。

第IV章 自然科学的分析

加美町東山官衙遺跡周辺地区出土火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

東北地方宮城県域北部とその周辺には、鳴子、鬼首、栗駒、肘折、十和田など東北地方の火山のはか、洞爺、御岳、三瓶、阿蘇、姶良など遠方の火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり（たとえば早田, 1989, 町田・新井, 2003など）、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な火山灰層が認められた加美町東山官衙遺跡周辺地区においても、採取された試料を対象に火山ガラス比分析と屈折率測定を行って指標テフラとの同定を行い、遺構や土層の層位や年代などに関する基礎的な資料を収集することになった。調査分析の対象となった試料は、h地点SD-203覆土から発掘調査担当者により採取された「灰白サンプル」である。

2. 火山ガラス比分析

（1）分析試料と分析方法

「灰白サンプル」について、火山ガラス比分析を行って、含まれる火山ガラスの色調形態別比率を求めた。火山ガラス比分析の方法は次の通りである。

- 1) 試料7.5gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析筒により、1/4～1/8mmおよび1/8～1/16mmを箇別。
- 5) 1/4～1/8mmの250粒子について、偏光顕微鏡下で火山ガラスの色調および形態別比率を求める。

（2）分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図1に、その内訳を表1に示す。この試料（粒径1/4～1/8mm）には、火山ガラスが38.4%含まれている。火山ガラスは量が多い順に、纖維束状に発泡した軽石型（22.4%）、スポンジ状に発泡した軽石型（透明および白色：9.6%）、バブル型（透明：4.8%）、分厚い中間型（透明：1.6%）である。

3. 屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

「灰白サンプル」に含まれる火山ガラス（1/8～1/16mm）を対象に、温度変化型屈折率測定装置

(MAIOT) により、試料に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。「灰白サンプル」に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.498-1.507である。水和が進んでいないものが多く、屈折率 (n) のrangeが広い特徴がある。

4. 考 察

測定分析の対象となった試料に含まれる火山ガラスは、火山ガラスの色調や形態、さらに屈折率(表3)などから、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田a火山灰 (To-a, 大池, 1972, 町田ほか, 1981, 町田・新井, 1992, 2003) に由来すると考えられる。なお、さらに同定精度を向上させるとすれば、信頼度の高いエレクトロンプローブX線マイクロアナライザー (EPMA) による火山ガラスの主成分化学組成分析が行われると良い。

分析者による土層観察や試料採取が行われていないことから、その産出状況については不明な点はあるものの、SD-203覆土中にその降灰層準があるとすれば、SD-203はTo-aより下位にあることになる。なお、本遺跡より北方の岩手県南部胆沢扇状地周辺で認められるTo-aの一次堆積層には、特徴的なユニットを含む成層構造が認められる(古環境研究所、未公表資料)。したがって、本遺跡やその周辺における土層観察の際には、このようなTo-aの堆積構造も考慮しながら観察記載されると良い。

5. まとめ

東山官衙遺跡周辺地区 h 地点SD-203覆土から採取された「灰白サンプル」について火山ガラス比分析と屈折率測定を行った。その結果、試料に含まれる火山ガラスについては、十和田aテフラ (To-a, 915年) に由来すると考えられた。試料が採取されたSD-203については、降灰層準が遺構覆土中にあるとすればTo-aより下位にあると推定される。

文献

- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス、東京大学出版会、276p.
町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス、東京大学出版会、336p.
町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ、科学、51, p.562-569.
大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究、11, p.232-233.
早田 勉 (1989) テフロクロノロジーによる前期旧石器時代遺物包含層の検討、第四紀研究、28, p.269-282.

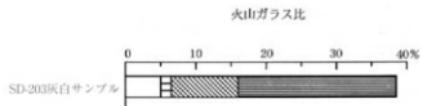


図1 h地点の火山ガラス比ダイヤグラム

表1 火山ガラス比分析結果

地 点	試 料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm (sp)	pm (fb)	その他の	合 計
h 地点・SD-203	灰白サンプル	12	0	0	4	24	56	154	250

数字は粒子数。bw: パブル型、md: 中間型、pm: 軽石型、cl: 透明、pb: 淡褐色、br: 褐色、sp: スポンジ状、fb: 繊維束状。

表2 屈折率測定結果

地 点	試 料	火山ガラスの屈折率 (n)
h 地点・SD-203	灰白サンプル	1.498 - 1.507

屈折率測定は、温度変化型屈折率測定装置 (MAIOT) による。

表3 東山官衙遺跡とその周辺に分布する後期更新世後半以降の指標テフラの諸特徴^①

テ フ ラ	噴出年代	火山ガラスの形態	火山ガラスの屈折率 (n)
十和田a (To-a)	915A.D.	pm (bw)	1.496 - 1.508
十和田中揮 (To-Cu)	6	pm (bw)	1.508 - 1.512
鬼界アカホヤ (K-Ah)	73	bw, pm	1.508 - 1.516
十和田八戸 (To-H)	15	pm	1.505 - 1.509
浅間板鼻黄色 (草津, As-YP・K)	15 - 16.5	pm	1.502 - 1.504
鳴子湯沼上層 (Nr-KU)	20 ²	pm	1.492 - 1.500
姶良Tn火山灰 (AT)	26 - 29	bw, pm	1.499 - 1.501
鳴子柳沢 (Nr-Y)	41 - 63	pm (bw)	1.500 - 1.503

*1: 町田・新井 (2003) から集成・加筆。噴出年代の単位は、ka (1,000年前)。

pm: 軽石型、bw: パブル型。() は量が少ないと示す。

第V章 総括

今回調査を行った3地点（b・g・h）において検出された遺構と遺物について、その特徴や年代などを整理するとともに東山官衙遺跡との関連を検討し、今後の課題などについてまとめておきたい。

1. 各地点の遺構の特徴と年代について

〈b地点〉

当地点の調査では、幅1mほどのごく狭い調査区を設定したのみで遺構の断ち割りも行っていないため、その細部については捉えられていないが、検出された土壙跡・堀跡・溝跡、積土の状況をある程度把握することができた。

規模・構造：SF01・SF02土壙跡、SD03堀跡は、後の時期の改変などが認められるが、検出状況から同時期の一連の遺構と捉えてよいと考えられる。P1柱穴もこれらの遺構と関連するものと思われる。これらの遺構のうち、SD03堀跡は明らかに新旧2時期（A・B）認められる。SF01・SF02土壙跡は新・旧（修築）があるかどうかは確認していないが、SF02ではSD03A・B堀跡よりもさらに古い段階の堀跡の可能性がある遺構の堆積土上部に積土（⑥）がなされていることから、少なくともSF02は積み直しされた可能性が高いと考えられる。SF01を切り崩して形成されたとみられるSX05積土は、SD03堀跡堆積土の上に積まれており、明らかに新しい段階の遺構である。また、SF01頂部付近にあるSD04溝跡はSX05と同じ段階に造られたか、もしくはこの後の時期の遺構と考えられる。

規模をみると、SF01とSF02の基底間の幅はおおむね21.0m、土壙頂部間の幅は推定で12.6mほどである（第14図）。SF01とSF02では高低差があり、調査地点では南側（SF01）が北側（SF02）に比べ50cmほど高い。調査地点から西へ20～30mほどの地点より以西では現状でも1m～2mほど高低差があり、明らかに南側のほうが高いことから、本来的に北側よりも南側が1～2mほど高かったものと思われる。なお、SD03B堀跡底面とSF01との高低差は約3.3m、SF02とは約2.8mである。

年代：SD03堀跡の堆積土上部からは10世紀前葉に降灰したと考えられている“灰白色火山灰”が検出されている。出土遺物はごくわずかだが、SD03A・B堀跡堆積土や土壙崩落土などから古代の土器や須恵器の小片が出土している。SD03A堆積土出土の須恵器坏（底部が回転ヘラケズリ）は8世紀中頃とみられるが、これらの遺物のみで遺構の年代の推定は難しい。しかし、灰白色火山灰とこれら少量の出土遺物から、SF01・SF02土壙跡やSD03A・B堀跡は少なくとも10世紀前葉以前の古代の遺構であることは明らかである。SX05積土・SD04溝跡はこれらよりも新しい段階の遺構であるが、時期の特定はできない。

〈g地点〉

規模・構造：切り通しの北面と南面において確認した遺構のうち、位置関係や堆積土などから北面のSD101aと南面のSD101b、北面のSD102aと南面のSD102bがそれぞれつながり、規模や形状からみればいざれも“堀跡”になるものと考えられる。堆積土は自然堆積土であり、黄褐色土ブロックなどを不均質に多く含む層が主体である。重複関係から西側のSD101a～SD101bは東側のSD102a～SD102b

よりも新しいことがわかる。断面形状からすると、これらの上部は東の斜面側（沢）に向かって流出してしまったものと考えられる。

これらの掘跡の下部にある北面のSX103a・SX104a・SX105a、南面のSX103b・SX104b・SX105bは部分的な確認であるが、その堆積土は黄褐色土ブロックを多く含む硬くしまった層を主体としており、一部は人為的な積土である可能性もある。この切り通し地点では“土塁”本体の痕跡は認められなかったが、この地点より南へ20～30mほど下った場所ではわずかではあるが土塁状の高まりや堀状のくぼみが認められこと、SD101a・SD101b、SD102a・SD102bはその堆積土が土塁崩落土に類似することなどから、本来はこの地点にも土塁が存在した可能性が高いと思われる。SX103a～SX105a、SX103b～SX105bなどは、土塁構築と関連がある遺構かもしれない。

今回確認した新旧の2条の“堀跡”は、土塁とセットになる堀とみられ、この地点でも本来は土塁と堀が丘陵上を南北方向に延びていたものと考えられる。

年代：北面のSD101aと南面のSD101bの堆積土上位からは、わずかであるが灰白色火山灰ブロックが検出されている。また、SD101a・SD102b堆積土、搅乱土などから古代の土師器・須恵器小片・頸部に櫛描波状文をもつ須恵器甕など数片が出土している。したがって、この地点で確認された堀跡とみられる遺構もやはり10世紀前葉以前の古代の遺構であると言えるが、これ以上の年代の限定はできない。

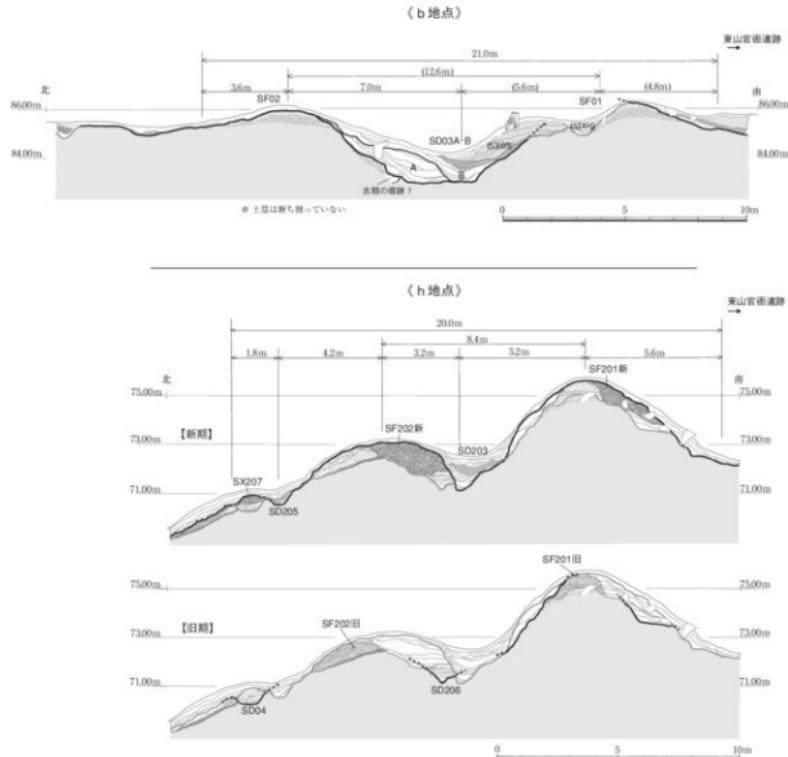
《h 地点》

規模・構造：当地点では、土塁状の高まりと堀状のくぼみは高さの異なる2条の土塁跡（SF201・SF202）と断面がV字状になる堀跡（新：SD203、旧：SD206）であり、北側のSF02土塁裾部には溝跡（新：SD205、旧：SD204）や若干の高まりを持つ積土（SX207）があることが確認されている。

SF201・SF202土塁は一度修築されており、いずれも南面側が積み直しされている。また、これらの土塁に挟まれた堀跡には“SD203”とSF202土塁新積土下に“SD206”、SF202北辺裾部の溝跡には“SD205”とSX207積土下に“SD204”が認められ、2条ずつある堀跡や溝跡にも新旧2時期（堀：SD206→SD203、溝：SD204→SD205）することがわかった。すなわち、当地点の土塁と堀跡・溝跡は全体が一度修築されており、重複関係や土塁積土の特徴などから旧期がSF201（旧積土）-SF202（旧積土）-SD206堀跡-SD204溝跡、新期がSF201（新積土）-SF202（新積土）-SD203堀跡-SD205溝跡-SX207積土の対応関係になるものと考えられる（第14図）。

新阶段の規模をみると、南側のSF201土塁裾部と北側のSX207積土までの幅は約20.0m、SF201とSF202土塁頂部間の幅は8.4mである。SF201とSF202土塁とでは高低差があり、b地点と同様、北側（SF202）に比べ南側（SF201）が高く、調査地点では2.5mほどの高低差がある。調査地点以外でもやはり南側が高くなっている。SD203堀跡の底面はSF201土塁頂部からは約4.5m、SF202土塁頂部からは約2.0mの深さである。

年代：SD203堀跡堆積土の中位付近から灰白色火山灰（第IV章 自然科学的分析を参照のこと）が検出されている。東壁面付近ではブロック状に確認できただけであったが、中央付近の堆積土の掘り下げ時には薄く層状をなしていた部分もある。遺物は、SF201・SF202土塁積土や崩落土、SD203堀跡



第14図 b・h地点の土壙・堀跡の規模

堆積土などから古代の土師器片や須恵器片が少量出土している。これらの中には底部付近に回転ヘラケズリを施した須恵器坏や静止系切りとみられる須恵器坏が含まれているが、やはり断片的な資料なので遺構の年代的位置づけの根拠にはできない。ただ、当地点の土壙と堀跡も、b地点と同様に10世紀前葉以前の古代の遺構であることは明らかである。

2. 東山官衙遺跡との関連について

これまで述べた3地点の発掘調査の結果および周辺域の踏査から得られた所見をまとめると、以下のような点が指摘できる。

- ①調査で確認されたb・h地点の2条の土壙跡と1条の堀跡はいずれも古代に属するものである。これらは踏査で確認されているi地点・k地点・n地点ともそれぞれつながり、東山官衙遺跡を取り巻くように展開するものと考えられる（第15図）。現状で確認できる地点を連結すると、総長は1.2kmほ

どになる。2条の土塁と1条の堀で構成されたこれらの区画施設は、全体の規模や位置関係、南側の土塁がより高く構築されている点などからみて、100~200mほど離れた丘陵末端部に位置する東山官衙遺跡の「外郭施設」として位置づけることができるものと考えられる。この場合、奈良・平安時代の堅穴住居跡が検出されている「早風遺跡」は少なくともその内部に取り込まれることになる⁽²¹⁾。

②g 地点でも堀跡とみられる古代の造構があり、これはその延長線上にある北側のd地点の土塁状の高まり・堀状のくぼみと結びつく可能性がある。ただ、これらは前述のh・i・k・b・n 地点のものと規模が異なり（d 地点は1条の高まりと堀状のくぼみ）、h～n 地点とは別枠で捉えておくべきものと考えられる。内部を区画する施設であった可能性も考慮すべきかと思われる。

③2条の土塁と1条の堀で構成される外郭施設の構築年代については、先にも述べたように灰白色火山灰を手がかりに10世紀前葉以前との位置づけができる。しかし、これ以上の限定は困難である。また、少なくとも一度修築されていることが判明しているが、その時期についても不明確である。ただ、全体的にみると、b 地点やh 地点、g 地点の少量の須恵器壺や甕などの出土遺物には8世紀中葉頃から後半頃のものが目立ち、土師器片を見る限りではロクロ調整のものはわずかに1片（b 地点：SF01崩落土出土）のみである。こうした出土遺物の傾向から、これらの構築年代については8世紀代まで遡ると考えることは可能かもしれない。

ところで、東山官衙遺跡の南に広がる「壇の越遺跡」では、8世紀後葉以降に構築されたと推定される築地塀が延びており（第3図・第15図）、門や櫓などとみられる施設も備えている。これらの区画施設は、東山官衙遺跡を中心として築造された可能性があることがすでに指摘されている（加美町教育委員会 2004a）。今回確認された土塁と堀跡の構築年代、修築の時期などが明確ではないことから現時点では両者の直接の関連性には言及できないが、全体の構成からみればともに東山官衙遺跡の外郭施設として機能していたことは明らかであると考えられる。

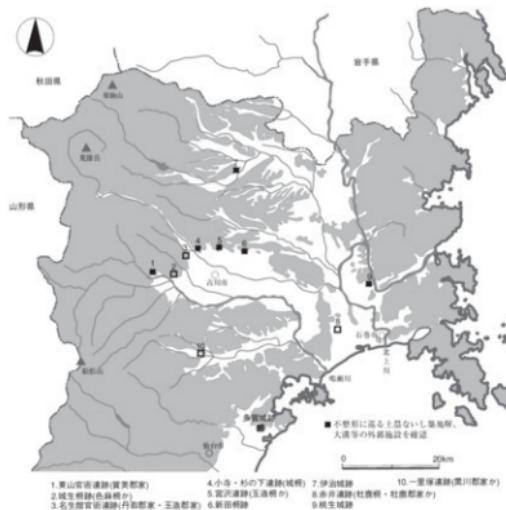
3. 外郭施設をもつ城柵遺跡について

土塁ないし築地塀・堀（大溝）などが不整形に巡る外郭施設をもつ例は、県内では栗原市（旧染館町）伊治城跡、石巻市（旧桃生町）桃生城跡、古川市宮沢遺跡、田尻町新田柵跡など、県北域の城柵遺跡で知られている（第16図）。これらは、政庁→内郭→外郭という三重構造もしくは複郭的な構成をとるという特徴が指摘されている（熊谷 2004a、村田 2004）。外郭施設をみると、伊治城では南辺



第15図 東山官衙遺跡と周辺地区

(築地堀と大溝か)を除く他辺が土塁+大溝、宮沢遺跡は築地堀・土塁+大溝、新田柵は築地堀+大溝が広い範囲を不整形に巡り、桃生城は前3者とはやや構造が異なるが築地堀・土塁・材木堀+大溝が外郭区画として用いられている。その規模や構成・形状は地形などにも制約されてそれぞれ違いがあり、政庁など未確認の遺跡もあるが、これら三重構造もしくはそれに近い構成をとる城柵の基本的なあり方には共通性が認められる。



第16図 宮城県北域の城柵・官衙遺跡

東山官衙遺跡でもこうした城柵遺跡と共通する外郭施設をもち、その全体的な構成にも類似する点があることは、これまで述べてきた調査成果からより明確になってきたと思われる。土塁（2条）と堀（1条）からなる外郭施設を今回確認したことによって、東山官衙遺跡でも政庁-内郭（築地堀）-外郭（土塁・堀）の配置をとることがはっきりしてきた。この状況からすれば、以前から指摘されているように東山官衙遺跡が城柵としての機能・性格を兼ね備えていた可能性がさらに高くなってきたとも言える。しかし、その全体構成や構築年代・変遷など不明な点は多く、今後の検討がなお必要であろう。

また、今回の踏査に加えた東方約5kmの城生柵跡周辺でも“土塁状・堀状の遺構”が確認されており、県北域とくに大崎平野の丘陵縁辺部に展開する城柵・官衙遺跡では、いずれも共通して土塁あるいは築地堀・堀（大溝）などを不整形に巡らす外郭施設を備えていた可能性が出てきた。今後はこうした点も踏まえて、当地域の城柵・官衙遺跡の構造的特徴、機能・性格などを改めて検討していく必要もあると思われる。

註1 外郭内の住居域になると考えられる。なお、北の丘陵地にある鳥谷ヶ森遺跡、南東の丘陵末端部にある上の山遺跡（古代遺物の散布地）も外郭区画施設の範囲に入る可能性がある。

引用・参考文献

- 相原 淳一 2004 「桃生城跡－平成15年度調査の概要－」『第30回古代城柵官衙道路検討会資料』pp.39～45
(古代城柵官衙道路検討会)
- 吾妻 俊典ほか 2002 「桃生城跡第1次～第10次発掘調査の概要」『考古学ジャーナル』No.494 pp.34～38
- 今泉 隆雄 1992 「律令国家とエミシ」『新版 古代の日本 ⑨東北・北海道』pp.163～198 (角川書店)
- 井上克弘・山田一郎 1990 「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ“十和田・大湯浮石”の同定」[第四紀研究]第29巻2号 pp.121～130
- 加美町教育委員会 2004a 「壇の越遺跡V－宮城県北部地区県営は場整備事業に伴う平成12年度発掘調査報告書－」
加美町文化財調査報告書第1集
- 2004b 「壇の越遺跡VI－平成13年度昭喰は場整備事業関連発掘調査報告書－」* 第2集
- 2004c 「壇の越遺跡VII－點道鳥屋ヶ崎・小野田線に伴う平成12～14年度発掘調査報告書－」* 第3集
- 2005a 「壇の越遺跡VIII」* 第5集
- 2005b 「壇の越遺跡IX」* 第6集
- 2005c 「東山遺跡Ⅹ－第8・9次発掘調査報告書－」* 第7集
- 熊谷 公男 2004a 「蝦夷の地と古代国家」日本史リブレット11 (山川出版社)
- 2004b 「古代の蝦夷と城柵」歴史ライブラリー178 (吉川弘文館)
- 桑原 達郎 1992 「城柵を中心とする古代官衙」『新版 古代の日本 ⑨東北・北海道』pp.201～230 (角川書店)
- 齊藤 篤 2003 「東山官衙道路の概要」『第29回古代城柵官衙道路検討会資料集』pp.165～170
- 進藤 秋輝 1991 「古代城柵の設置とその意義」「北からの視点」日本考古学協会1991年度宮城・仙台大会資料集
pp.131～142
- 早田 勉 2003 「第IV章－1～4 鳴子柳沢テフラ層(Nr-Y)の層序・分布・層位」「宮城県岩出山町・座敷乱木
遺跡検証発掘調査報告書」pp.35～37
- 高橋 誠明 2003 「多賀城創建にいたる黒川以北10郡の様相－山道地方－」『第29回古代城柵官衙道路検討会資料集』
pp.59～75
- 田尻町教育委員会 1998 「新田柵跡推定地」田尻町文化財調査報告書第3集
- 2001 「新田柵跡推定地3」「新田柵跡推定地3ほか」* 第5集
- 築館町教育委員会 2000 「伊治城跡－平成11年度：第26次発掘調査報告書－」築館町文化財調査報告書第13集
- 2002 「伊治城跡・嘉倉貝塚」築館町文化財調査報告書第15集
- 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所編 2003 「古代の官衙道路 I 道構編」
- 古川市教育委員会 1995 「小寺遺跡」宮城県古川市文化財調査報告書第18集
- 2004 「名生館官衙道路X-XIV－平成15年度発掘調査概報－」宮城県古川市文化財調査報告書第35集
- 宮城県教育委員会・日本道路公団 1980 「(1)宮沢遺跡」「東北自動車道道路調査報告書Ⅲ」宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県教育委員会 1985 「古川市宮沢遺跡－化女沼ダム建設関係I－」* 第105集
- 1997 「壇の越遺跡他」「舟場遺跡ほか」* 第173集
- 1998 「壇の越遺跡」「壇の越遺跡・念南寺遺跡」* 第177集
- 2003 「壇の越遺跡」「壇の越遺跡ほか」* 第195集
- 2004 「壇の越遺跡」「壇の越遺跡ほか」* 第199集
- 2005 「壇の越遺跡」「壇の越遺跡ほか」* 第202集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1987 「東山遺跡 I」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第12冊
- 1988 「東山遺跡 II」* 第13冊
- 1989 「東山遺跡 III」* 第14冊
- 1990 「東山遺跡 IV」* 第15冊
- 1991 「東山遺跡 V」* 第16冊
- 1992 「東山遺跡 VI」* 第17冊
- 1993 「東山遺跡 VII」* 第18冊
- 1997 「桃生城跡 V」* 第22冊

- 宮崎町教育委員会 1980 「早風遺跡発掘調査報告書」宮崎町文化財調査報告書第3集
- 1996 「東山遺跡X」 * 第7集
- 1997 「東山遺跡XⅠ」 * 第8集
- 1998 「東山遺跡XⅡ」 * 第9集
- 1999 a 「壇の越遺跡II - 平成10年度発掘調査報告書 - 」 * 第10集
- 1999 b 「壇の越遺跡III - 平成10年度発掘調査報告書 - 」 * 第11集
- 2003 「壇の越遺跡IV - 平成11年度発掘調査報告書 - 」 * 第13集
- 宮崎町史編纂委員会 1973 「宮崎町史」
- 村田晃一・吉田桂 2003 「城生櫻跡の概要」『第29回古代城櫻官衙遺跡検討会資料』pp.77~90
- 村田晃一 2004 「三重構造城櫻論 -伊治城の基本的な整理を中心として 移民の時代2-」『宮城考古学』第6号
pp.159~196
- 梅沢和明 2001 「桃生城跡発掘調査の概要」『第27回古代城櫻官衙遺跡検討会資料』pp.77~100
- 山田一郎・庄司貞雄 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』
pp.97~102

